

巻頭言 「大学科目」の伝統と挑戦	
池田大作記念創価教育研究所長 勘坂 純市……	1
[WLC] WLCの取り組み……	2-3
[GCP] GCPの取り組み……	4
[SPACe] 2024年度秋学期についてのご報告……	5-6
[CETL] CETLの取り組み……	7
データサイエンス教育推進センター……	8
新任教職員紹介……	8

「大学科目」の伝統と挑戦



池田大作記念創価教育研究所長 勘坂 純市

「大 学科目」とは、「創価大学の歴史や創立の精神を学ぶ」科目群であり、現在、「創価教育論」「人間教育論A」「人間教育論B」「人間教育論応用」「現代文明論」「大学史の中の創価大学」「共通基礎演習」「Soka education」の8つの科目が含まれる（『Soka University履修要綱』2025年入学生用）。大学科目群は、2003年度のカリキュラム改正で設置された（当時は、「21世紀文明論」「人間教育論」「大学論」の3科目）。その背景の一つには、2000年ごろから、日本の各大学で「建学の精神」・学校の歴史・創立者等について学ぶ「自校史教育」が広がってきたことがある（湯川次義他（2010）『自校史教育』に関する基盤的研究『早稲田教育評論』24巻1号）。さらに2018年には、中央教育審議会も、大学等の「高等教育機関自らが、『建学の精神』や『ミッション』、教育研究についての説明責任を果たしていくこと」の重要性を謳った（『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』）。本学の大学科目も、こうした社会的要請に応える試みといえるだろう。

しかし、創価大学の大学科目には、いまひとつ忘れてはならない淵源がある。それは、草創期の学生自身が、建学の精神を学び、具体化しようという模索の中で、いままでいう大学科目を産み出していったということだ。1971年の建学当時、「創立者の理念に共鳴して」集った一期生には、創価大学の教育に「建学の精神を反映した独自性がない」という不満をもつ者も多かった（山崎純一「私の学生時代」『創価教育』3号）。その中で、学生たちは「自主講座」というかたちで、建学の精神を具体化する科目を開設しようとする。ガリ版刷の『自治会新報』創刊号（1973年6月11日）には、以下の文章がある。「此の度、自治会の構想の一つであった自主講座を開講する運びとなりました。…/自主講座というのは言うまでもなく、学生が主体となって一切を運営していく事に最大の特徴があります。従って教鞭をとる者に限らず、社会の第一線で闘っている人々を招いて講義をしていただき、又は大いにディスカッションする中で、生きた学問——生活に根差した——を研鑽し人生論・哲学論・宗教論等を通して、幅広い教養と学識更には“生き方”を身につけていただきたいと思います。」

学生が運営する自主講座は、1960年代末の大学紛争のなかで誕生し、各大学に広がっていた。創価大学の自主講

座も、こうした潮流のなかに位置づけることができるだろう。1973年6月に2つの自主講座が開講、9月にはさらに10講座が開講された。その後、宇井純、西園寺一晃、松本健一、大岡信、加藤周一などを招いて講義が行われている（『創価大学50年の歴史』84, 148頁）。

また、自主講座には、創価大学の建学の精神や創立者の思想を探究する講義もあった。そこでは、志村栄一（『潮』編集長）による創立者とアンドレ・マルローとの対談集についての講義、また第3回入学式での創立者の講演「創造的人間たれ」などを教材とした講座が含まれている。

その後、1995年には、自主講座の伝統を継ぎ学生自治会が運営していた「21世紀文明論」が、共通科目の「総合科目」のなかに位置づけられ、単位修得ができる科目となった。しかし、その後も、科目の運営には学生自治会が深くかかわっていた。私も、1994年に創価大学に赴任した後、「21世紀文明論」の数回を担当した。講義の担当を依頼するために研究室を訪ねてきた自治会の諸君の熱意は忘れられない。学生こそが創立者の示した「建学の精神」を実現する、そのためにこの講義がある等の話をされたと記憶している。学生が主体となる自主講座の精神は確かに受け継がれていた。授業では、創立者とゴルバチョフの対談集を用いた。通常の授業にはない熱気をもった教室の雰囲気もよく覚えている。

だが、先述の2003年の大学科目群の設置のころから、授業運営は主に教員が主に担うようになっていったようだ。背景の一つには、教員のなかに創価大学卒業生が増えたこともあるだろう。かつて学生として「自主講座」を運営していた人びとが大学の教員になったのだから、それは自然な傾向であったかもしれない。しかし、創価大学の大学科目は、創立者の示した建学の精神を実現するために、学生自身が作りだした講座に淵源があることは、決して忘れてはならないだろう。その伝統を継承、発展させるために、2023年度には、学士課程教育機構運営委員会のもとに、「大学科目検討委員会」を設置した。そこでは、セメスター毎に、大学科目の担当教員・職員と学生自治会代表が集まり、大学科目を改善するための協議を進めている。これからも、検討委員会の自治会メンバーはもとより、各大学科目を履修した学生たちと語り合いながら、新たな大学科目の歴史を築いていきたい。

日本自律学習学会年次大会開催報告

- 10月26日、学習者の自律性の育成とセルフ・アクセス・センター（SAC）での言語学習を推進する教育者、研究者、学生が一堂に会する2024年度日本自律学習学会年次大会（The Japan Association for Self-Access Learning: JASAL 2024）が創価大学において開催されました。
- JASAL 2024では、対面とリモートの両方によるハイブリッドセッションを含む30以上の研究発表や、ワークショップ、ポスター発表が行われました。中でも、JASAL 2024のハイライトは、創価大学の学生によるWLC SACのガイド付きツアーでした。これにより、参加者は日本の先駆的なSACの一つである創価大学WLC SACについて見識を深め、創価大学が長年にわたり自律的な言語学習環境の整備に取り組んでいることを知りました。このツアーで参加者は、学生が自身の言語学習という旅を自分で管理するため、利用できるリソースとサポートを直接体験することができました。
- 創価大学のアンドリュー・トゥイード准教授が本大会の運営委員長を務め、大会全体を調整し監督しました。JASAL 2024の成功は、約30人のボランティアを含む創

価大学JASAL 2024運営委員会の献身的な努力によって可能になりました。教員と学生の両方で構成されるこのチームは、WLC SACのスタッフと協力し、大会への参加がすべての参加者にとって充実した体験となるよう尽力しました。

- JASAL 2024において参加者は新しい方法論を探求し、革新的な教育戦略を交換し、専門家のネットワークを強化しました。JASAL 2024で得られた洞察は、間違いなく将来の取り組みや研究を形作るでしょう。同時にこの大会では、日本における学習者の自律性と自己主導型言語学習を促進するリーダーとしての創価大学の役割が再確認されました。創価大学はSACを利用した言語教育を支援し続けており、学生が自身の学習に責任を持ち、有意義な異文化体験に積極的に参加できる環境を育むことに大きな誇りを持っています。この大会の成果はその取り組みの証でした。
- JASAL 2024の成功を踏まえ、創価大学WLCはこの分野に貢献するため今後も挑戦を続けます。参加者全員が示した熱意と献身により、この重要な教育分野は今後も進化し、発展し続けることでしょう（アンドリュー・トゥイード）。



WLCセルフ・アクセス・センター（SAC）

更なる飛躍へ向かって

- 2024年度、WLC SACでは、学生が英語の学習法や、学習上生じる問題について相談できるEnglish Consultation Room (ECR) の名称をEnglish Advising Corner (EAC) に変更しました。Consultation（相談）という語を用いると、学生に、自分は問題のある学生だという印象を与え、学生を遠ざけていると思われました。これに対し、Advising（助言）という語を用いることで、直接的な表現を抑え、学生の来室を歓迎しているメッセージを発信するようになりました。これにより、学生は英語学習で直面している問題を話し合う場に参加するのだ、と捉えることができるようになりました。実際、専門的にadvisingとは、学習者の自己認識と自律性を信頼する言語教育の一つの実践です。従って、今回の名称変

更により、英語教育の専門性を活かしながら、EACをより身近な施設に感じてもらうことができましたと感じています。

- さらに、2025年度から Speaking Test Preparation CenterをEACに統合します。このようにすることで、同センターを担当する助教に対し、より包括的で組織的なトレーニングの提供が可能になります。このトレーニングを経た助教には認定証を授与することを考えています。助教はこのトレーニングにおいて、TOEFL iBTやIELTSのスピーキングテストを受ける学生に効果的な支援をする方法を学びます。同時に、英語学習について専門的な助言をすることもできるようになります。これらの知識と経験は、助教が将来新たな職を得る競争力を高めます。
- 2025年度春学期には、異文化交流ナイト、タイ・モンクット王工科大学トンプリ校の大学院生によるプレゼンテーション、ゲームナイトなどのイベントを実施予定です。今後も

SACは、学生が自身の語学学習の旅路を意欲的に歩む環境を提供していきます（マリ・クロマツ）。

グローバル・レクチャー・シリーズ (GLS)

●11月27日、GLSの21回目の講演が、国境なき医師団から村上大樹医師をお迎えし、開催されました。村上医師は東京を拠点とする外科医兼教授で、2008年から国境なき医師団でボランティアとして活動しており、アフリカ、アジア、中東の自然災害や人道危機の被害を受けた地域に12回派遣されています。

●村上医師の講演タイトルは「どうすれば平和を築けるか？人道支援の現場から」でした。コリン・ランドルWLC副センター長による紹介の後、村上医師は国境なき医師団の歴史と哲学を概説し、人道危機に関わるすべての関係者との対話の実践を強調しました。村上医師は、この組織でボランティア活動を始めた動機や派遣中の経験を紹介しました。村上医師の魅力的な講演には、現場で捉えた迫力ある映像が添えられていました。

●村上医師は自身の経験を述べた後、学生に「平和とどう関わることができるか」について考えるよう求めました。平和は日常生活から始まり、家族、学校、コミュニティ、社会との交流が含まれ、その後外に広がっていくと説明しました。また、聴衆に客観的な情報を求め、さまざまな背景を考慮して柔軟な思考をするよう促しました。村上医師は、自身の経験から学んだ重要な教訓として、「常識は常に常識であるとは限らない」こと、そしてすべての視点を考慮し尊重する必要があると述べました。村上医師は最後に、日常生活や、特に自分とは異なる背景を持つ人々と関わる時は、いつでも小さな行動を通して得られる共感が鍵となると説明しました。

●本講演には、100人以上の学生と15人の教員が参加しました。学生の中には講演前の1週間に英会話練習施設であるイングリッシュ・フォーラムでのディスカッション、講演の要点を事前に学ぶランチタイムのチュートリアル等で十分に準備し臨んだ者もいました。参加者の多くは、講義中熱心にメモを取ったり、思慮深い質問をしたりして、講義への高い参加意欲を示していました。

●村上医師は時間を惜しまず、講演終了後も列に並んだ学生の質問に答えました。講演は好評で、多くの好意的なコメントが寄せられ、このような人道支援組織に自ら参加することに興味を持つ学生が出たことも分かりました。グローバルに行動し、平和に貢献するために参加者一人ひとりに、何ができるかを考えるよう刺激を与えてくれた村上医師に感謝します（ザッカリー・ケリー）。

WLCプロフェッショナル・ディベロップメント (PD)

●2024年度秋学期WLCPDセッションは、12月18日にZoomで開催されました。このセッションは、英語教育におけるAIの役割や、経験、懸念を共有する機会となりました。主な目標は、創価大学の方針に沿いながら、英語教育におけるAIガイドライン策定の準備をすることでした。

●これまで、教育におけるAIの二面性、つまり学習と生産性を高める可能性と、誤情報の混入、盗用、不正などのリスクが強調されてきました。議論では、これらを踏まえつつ、AIが学生の学習と言語習得に与える影響について互いの洞察を共有しました。

●議論の要点は以下のとおりです。

- ・課題でのAIの使用に関する明確な書面によるガイドラインを確立し、学生はAIを利用した場合、その事実を明記し、倫理基準を遵守しなければならない。
- ・ブレインストーミングやアウトライン作成などの許容されるAIアプリケーションの使用と、AIで生成した成果物をそのまま最終提出物とすることを区別すべきである。
- ・AIの使用を監視し、学術的誠実性を維持するため、学生のAI利用状況や目的などを継続的に調査する必要がある。
- ・AIリテラシーを促進し、学生はAIで生成されたコンテンツを批判的に評価し、潜在的な不適切さを発見できることが望ましい。

●このセッションで英語教育におけるAIの利用について、多様な視点から議論することができました。このような機会は、教育における技術の進歩に適応しながら自律した学習を促進するというWLCの取り組みに合致したものでした（ジェイミ・パードン）。

■WLC 教員の紹介 ブライアン・ブシュナー講師



米国出身のブライアン・ブシュナー講師は、フロリダ州立大学で歴史学の学士号、ニューメキシコ州立大学で同じく歴史学の修士号を取得しました。ペンシルベニア州立大学で取得した博士号は、応用言語学とアジア研究のダブル学位であり、幅広い学際的研究に対し授与されたものです。2023年に講師として創価大学に着任し、主に共通科目英語科目を担当しています。研究対象には、アカデミックライティング、職業目的の英語、学習者の自律性、社会文化理論などがあります。創価大学のセルフ・アクセス・セ

ンターの運営に携わり、生涯にわたり利用できる学習スキルの習得を支援し、学生スタッフやボランティアに対するトレーニングを提供しています。さらに、フィリピンイースト大学への語学研修の引率として現地を訪れ、異文化体験を充実させる活動の開発に協力しました。現在の研究プロジェクトでは、生涯学習を促進するために、カウンセリング、批判的思考スキル、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) を教室での指導に統合する方法について調査しています。ブシュナー講師は、現在の研究を基にして、創価大学のすべての学生が学習スキルを高め、学問的にも人間的にも成長できるようにしたいと考えています。

GCPディレクター 教授 佐々木 諭

第14回成果報告会を開催

2024年12月17日(火)、グローバル・シティズンシップ・プログラム(GCP)の第14回成果報告会が開催されました。成果報告会では、GCP生は、2年間の学びの集大成として、プログラムゼミⅣの授業において取り組んだ地球的課題に対する問題分析と課題解決をもとに、学生の立場から取り組める具体的な提案を発表します。

今回は14期生ら30名が5つのグループに分かれ、環境、健康、衛生、食料、廃棄物に関する課題に対して解決策を発表しました。

コメンテーターとして参加された北野尚宏教授(早稲田大学、元JICA研究所所長)は、各グループの発表に関して学術的な視点よりフィードバックを行い、GCP生に対しては、「地球規模の視野に立ち、日本また世界で活躍されることを念願しております」と期待を述べられました。



第12回GCP修了式を開催

第12回GCP修了式が2025年3月17日(月)に開催され、田代理事長はじめ大学首脳がGCP修了生18名の新たな出発を祝福しました。

修了式では、修了生を代表して、仁後明美さん(GCP11期・経済学部卒業)と上栗弘明さん(GCP12期・経営学部卒業)が挨拶を行いました。仁後さんは、コロナ禍の影響により入学後の授業がオンライン授業となるなか、積極的に授業に参加し、教員にアドバイスを求め勉学に挑戦をされました。米国への交換留学を勝ち取り、帰国後はTOEIC990点を取得し、卒業後は、外資系IT企業に就職されています。上栗さんは、「創大でしか学べないことを、思う存分学び抜こう」との決意を胸に勉学に徹し、カナダのビジネススクールへの留学では、大学院の授業も履修し、高いレベルの学問に挑みました。卒業後は、大手建設会社に就職し、財務分野のプロフェッショナルを目指しています。



フィリピン・キャピトル大学研修 タイ・タマサート大学オンライン研修を開催

2025年2月9日(日)から2月20日(木)までの期間、フィリピン・キャピトル大学において海外短期研修が開催され、GCP15期生が参加しました。研修開講式には、キャピトル大学のファレス首席副学長、トーレス教務担当副学長ら大学首脳はじめ教員、学生らが参加し、GCP生を温かく迎えてくれました。開講式の挨拶で、ファレス副学長は、これまでの創価大学とキャピトル大学の交流の歴史を詳述し、GCP研修が両大学の創立者が目指された平和に貢献する人材の育成に大きく寄与していると称えられました。

研修はGCPのプログラムゼミⅡの授業時に取り組んだフィリピンに関するグループリサーチをもとに、現地調査を行うことを目的とし、行政機関、学校、医療施設、農村でのインタビュー調査を実施しました。現地調査を取りまとめたリサーチ発表会では、キャピトル大学の先生方がそれぞれのグループの発表に対して丁寧に講評し、GCP生の学びの姿を高く評価されました。

研修に参加した学生は、世界市民として多様性を尊重することの大切さと真摯に正しいことを見極めていくことの重要性を学び、今後の学びへの決意を深め合っていました。



また、2025年3月24日(月)には、タイ・タマサート大学、キャピトル大学とのオンラインリサーチフォーラムを開催し、研修に参加したGCP15期生とタマサート大学国際教養学部の学生がフィリピンに関するリサーチを発表しました。タマサート大学からはラノーング教授はじめ、ホンジャムラットシン教授、ミーソムブーンブーンスック教授、キャピトル大学からはラビエル教授、ヴァルデス教授が参加され、GCP生、タマサート大学生の発表に対して、活発なディスカッションが行われました。





2024年度秋学期についてのご報告

2024年秋学期のSPACeのサービスは、基本的に対面で（一部オンラインを併用）行いました。
以下、各部門の秋学期の利用者統計を報告します。

日本語ライティングセンター

■表 2024年秋学期 JWC 利用者（人）

	9月	10月	11月	12月	1月	合計	%
チュータリング（実施数）	1	81	81	38	18	219	63.48%
レポート診断	0	21	36	50	19	126	36.52%
合計	1	102	117	88	37	345	100.00%

■表 2024年秋学期 JWC 学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	主催	参加者
1	2024/09/11	JWC+図書館SRPブッククラブCafe	図書館・JWC連携	6
2	2024/10/22	レポートお助け隊	JWC	12
3	2024/10/30	葛飾の伝説を辿る：真間手児奈の物語	図書館・JWC連携	61
4	2024/11/14	文献検索セミナー【実践編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	12
5	2024/11/26	レポートお助け隊	JWC	10
6	2025/01/29	絵本ブッククラブ	図書館・JWC連携	13
合計				114

調べごと相談

■表 2024年度秋学期 SPACe調べごと相談（レファレンス）利用件数

	9月	10月	11月	12月	1月	合計
学術文章作法	1	6	4	6	1	18
演習（卒論）	3	1	0	0	0	4
その他	2	0	0	1	1	4
合計	6	7	4	7	2	26

Help Desk

■表 2024年度秋学期 Help Desk 利用者

	9月	10月	11月	12月	1月
予約	1	3	1	3	1
飛び入り	7	4	6	5	2
合計	8	7	7	8	3

■表 2024年度秋学期 Help Desk 学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	参加者
1	11月 1日	TOEICセミナー	35（予約者97）
2	11月20日	GPA向上セミナー	2（予約者8）
3	12月 4日	長期留学セミナー	9（予約者21）
4	12月18日	進路セミナー	2（予約者5）

オアシスプログラム

■表 2024年度 オアシス・プログラム 利用者（人）

学年	学部	性別
1年生	経済	男 21
2年生	法	女 11
3年生	文	
4年生	経営	
過年度生	教育	
	理工	
	看護	
	国際教養	

SPACeスタッフ研修

◆「質問会議」の研修

SPACeのサービスを担当しているHELP DESK、日本語ライティングセンター、オアシス・プログラム、データサイエンスセンターで連携し、春休みにスタッフ研修を行いました。

まず、スタッフの質問力を養成するために、「質問会議」の研修を行いました。講師は副機構長の望月雅光先生です。

「質問会議」はアクション・ラーニングの技法で、本学では「同僚会議」という名称でしばしばFDセミナーが行われています。

「質問会議」はその名が示す通り、短い質問とその質問への回答で構成され、勝手に自分の意見を述べてはいけないルールになっています。

そのため、どのような質問を行えば問題の本質に迫れるのか、メンバーの話を傾聴しつつ対話を深めていきます。



◆「アンコンシャスバイアス」の研修

次に、「アンコンシャスバイアス」の研修を行いました。講師はアンコンシャスバイアス研究所認定講師で日本薬科大学の鈴木浩子先生です。文学部のSAさんも参加してくださいました。

アンコンシャスバイアスは「無意識の思い込み」であり、「ヒト・モノ・コト」だけではなく、「自分」に対するものもあるそうです。

研修の冒頭では赤いラムネが提示され、「どんな味がすると思う？」という鈴木先生の問いかけがありました。「いちご味」「ラベルにラムネと書いてあるからラムネ味」「赤いからキムチ味じゃないか」など様々な声が上がりましたが、実はパイナップル味のラムネだったのです。

私たちがいかに無意識の思い込みで判断しているかということを実感した瞬間でした。

このように2つの研修の体験的な学びを通して、アカデミック・アドバイジングで必要な力を養成しました。



2024年度 学士課程教育機構主催のFD・SDの取り組み【秋学期実施分】

第11回創価大学教育フォーラム

10月5日（土）13時から第11回創価大学教育フォーラムを開催しました。第一部として学部や部局（経営学部、看護学部、IR室）が企画する分科会を、それに続いて15時から17時まで第二部のシンポジウムを行い、教職員・学生を中心に約170名の参加がありました。主催側の趣旨説明のあと、神立孝一 副学長からは「創立者と創価教育－創価大学50年を振り返って－」、アメリカ創価大学（SUA）の羽吹好史 前学長からは「アメリカ創価大学の歴史と教育」と題して、それぞれご講演いただきました。それらを受けて、学生を代表して教育学部4年・董福煌さん（学生自治会中央執行委員長）と国際教養学部3年・山田香織さん（第54回創大祭実行委員長）より、「建学の精神」具現化における学生の取り組みや学生生活におけるご自身の体験などをご紹介いただきました。創立者ご逝去一周忌を前

に、創立の精神を確認し、次の50年に向けた前進を参加者一同、確認し合う機会となりました。

第2回・第3回 学士課程教育機構 FD・SD セミナー

11月1日（金）第2回 FD/SD セミナーとして、関西大学教育開発支援センターの山田嘉徳 准教授に、「学習者中心の教育を実現するアセスメント・フィードバックの理論と実践」と題して、お話いただきました。2月18日（火）には第3回 FD/SD セミナーとして、公立千歳科学技術大学理工学部の小松川浩 教授を招いて開催しました。小松川教授には「学生の自律的な学びを促す生成 AI の活用：千歳科学技術大学の導入事例を参考に」と題して、AI を活用した学生の課題に対するフィードバックの仕組みと効果について、千歳科学技術大学の具体的な実践事例を交えながらお話いただきました。

新任教員研修

第3回新任教員スタートアップセミナー

1月25日（土）、第3回新任教員スタートアップセミナーが開催され、新任教員9名が参加しました。参加者同士で秋学期の取り組みを振り返り、山崎めぐみ SPACe センター長（学士課程教育機構・准教授）より、学生の躓きに気付くきっかけや学内における学習支援リソースなど学習支援についてお話いただきました。その後、科目ポートフォリオ機能の活用について、総合学習支援オフィスの石橋博道 部長より、活用の目的や効果、利用方法、機能紹介などについて説明がありました。



その他のCETL勉強会／研修会

10月18日、新任教員研修を兼ねた CETL 勉強会として「ICT・LMS活用入門－授業におけるクリッカーの活用－」を開催しました。創価教育研究所の坂口貴弘 講師より、担当授業におけるクリッカー利用例や履修者の反応、今後の検討課題などをご紹介いただき、続いて総合学習支援オフィスの石橋博道 部長より、「学習支援ポータルにおけるクリッカー機能の活用について」と題してお話いただきました。

1月28日、関田一彦 副学長（CETL センター長兼任）による「簡易版ティーチング・ポートフォリオ メンター研修会」を開催しました。簡易版 TP 作成にあたってはメンター役の教員が、TP 作成を通じて得た作成者の気づきについて深掘りします。そのため、本研修を通じてメンターに期待することや TP 作成の留意点などについて学び合い、参加者同士で実際にメンタリングを体験いたしました。

2月22日（土）、「アクションラーニング（同僚会議）セ

ッション研修会」を開催し、望月雅光 学士課程教育機構副機構長（経営学部教授）より、アクションラーニング（AL）の効能や手順などについてお話いただき、各参加者はグループに分かれて複数回、AL セッションを体験しました。



簡易版ティーチング・ポートフォリオ メンター研修を受ける受講者たち

データサイエンス教育における生成AIの学び

■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

■ 近年、ChatGPTをはじめとする生成AIは、ビジネスや研究、日常生活において急速に活用が進んでいます。データサイエンスの分野でも、AIを活用することでデータ分析の効率化や新たな知見の発見が可能になります。生成AIを学ぶことは、単に最新技術を理解するだけでなく、その活用方法や限界、倫理的課題を考える力を養うことにもつながります。特に、AIがどのようにデータを学習し、出力を生成するのかを知ることは、モデルの適切な評価や誤用の防止に不可欠です。今後、データサイエンティストに求められるスキルとして、AIの活用力はますます重要になります。そのため、生成AIを学ぶことは、データサイエンスの専門性を高め、社会に貢献するための重要な一歩となります。

■ データサイエンス副専攻では、共通科目の「データサイエンス演習B：アクセンチュア株式会社後援」において、生成AIについて重点的に学ぶ機会があります。この科目は、アクセンチュアに勤務する卒業生のサポートのもと授業が行われています。具体的には、自然言語処理、コンピュータ・ビジョン、責任あるAI、生成AIモデルの活用などについて学びます。昨年度の授業では「自然言語処理」については、人工知能からスタートして、理論やユースケースまた苦手とすることなど、様々な視点から学生たちは理解を深めることができました。学生たちからは「大規模な言語モデルの開発競争が進んでいるが、偏ったデータによる偏った学習がバイアスを生み出す危険性を学んだ」「AIはサステナブルなものと漠然と思っていたが、モデルの訓練には膨大なエネルギーを消費するため、環境に多大なコストをもたらしていることを知って非常に驚いた」などの感想がありました。

■ 次に「コンピュータ・ビジョン」については、コンピュータが画像や動画を処理して、写っている人物や物体を認識する技術について、基礎的な考え方から日常的な用途や応用方法も含めて学びました。例えば、自動車に取り付けられたカメラから運転者や周囲の人、物体から読み取れるあらゆる情報を認識し、事故を防ぐ技術が開発されています。学生たちからは「この技術が人々の生活の利便性向上のみならず、人の命をも守れる可能性があることを新たに学べた」「Pythonの演習を通して、画像をより正確に認識

する技術は、先人たちによる様々な努力や工夫の上で成り立っているということを感じました」などの感想がありました。

■ また「責任あるAI」とは、倫理的な問題やプライバシー、セキュリティなどの潜在的なリスクに企業や組織が責任を持って取り組み、作成したAIが安全で信頼できバイアスがないことを保証すること、またはそのための指針として掲げる基本原則や実践のことを意味します。従来の機械学習も含めてAIはブラックボックス的なもので、どのような判断をしているのかは外部からはわかりにくくなっています。このため説明可能なAI (Explainable artificial intelligence) として、AIの推論結果や判断プロセスを人間が理解できる形式で出力する技術が求められています。

■ 最後に「生成AIモデル」の活用として、昨年度の授業ではChatGPTを例に、生成AIを活用するために、適切なプロンプト設計を行うことに加え、生成結果の正しさを見極めるスキルが求められることを学びました。適切なプロンプト設計とは、「ロール定義」、「コンテキストの定義」、「明確なタスクの定義」、「フォーマットの定義」という4つの構成要素からなります。学生の感想として「この演習を通じて、生成AIとのコミュニケーションを効果的に行うための重要なポイントについて具体的に理解を深めることができました」「生成AIを効果的に活用するための知識やスキルは、現代社会において競争力を高める大きな武器となると思います。そのため、これからも生成AIの可能性を探求しながら、適切なプロンプト作成の技術を磨いていくことが必要であると強く感じました」などが寄せられました。このように、共通科目「データサイエンス演習B：アクセンチュア株式会社後援」では、生成AIについて重点的に学ぶことができます。

■ データサイエンス教育推進センターは2021年5月に開設されました。本センターのミッションは、学生たちが「世界市民として、各学部で学ぶ専門分野において、数理・データサイエンス・AIのスキルを活用した問題解決能力」を飛躍的に高めていけるように寄与していくことです。本センターは、今後も学内外と広く連携をとりながら、創価大学のデータサイエンス教育のさらなる充実化に向けて取り組んでいきます。

学士課程教育機構
新任教職員紹介

学士課程 講師 木原 宏子
学習支援課 職員 渡邊 香峰



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第29号
発行日 2025年5月3日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>